
百代の夢幻

佐和月そら

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百代の夢幻

【Nコード】

N4996G

【作者名】

佐和月そら

【あらすじ】

平安末期、平泉の高館で、今まさに義経は自害しようとしていた。しかし目の前で怪異が生じる……。夢と現がさまよう物語です。

最期だった。

いまや軍勢が館を取り囲んでいるのがわかる。平泉へ共に落ちのびた家来たちは、奮闘の末に討ち死にしたのだろう

つい少し前に、別れの挨拶をすませて立ち去った黒装束の大男を思い浮かべて、持仏堂に籠もっていた義経は、法華経を読み終えたと立ちあがった。約束したとおり、すでに三途の河で待っているだろうか。あの男のことだから、薙刀を逆様にして杖にして、仁王像のように威めしく突っ立ち、己を待ちわびているに違いない。

義経はくつくと笑った。あとは自分も死ぬだけである。

部屋の片隅では、先に御簾のなかで妻と子供が自害していた。鎌倉にいる義経の兄の命令で嫁いで来た河越重頼の娘は、自らの死にも無言でただ手を合わせていた。その傍らにいた幼子は、膝の上で両手をおいて正座していた。

義経はその亡骸にしばし眼をかたむけた。薄暗い床の上で永世の眠りについた妻は、ようやく安堵しているのかもしれない。京の都で初めて顔をあわせたとき、家への帰り道を失くした迷子のように、途方に暮れていた。それでも鎌倉へは帰らず、最期まで共にした。離縁もできたというのに。

許せ。

義経は亡骸から眼を逸らし、懷に手を入れた。取り出したのは短刀だった。

幼少の頃、鞍馬寺の別当から与えられた護り刀で、名のある刀鍛冶が願掛けのために鞍馬寺へ奉納したものだという。それを別当が願い受けだし大切にしていたが、幼かった義経が鞍馬寺へ来たおりに、護り刀として授けたのだった。以来、義経もこの短刀を常に離さず、西国での合戦でも鎧の下に差していた。

護り刀の鞘尻は唐草模様で籐を巻き、竹輪を互い違いにあしらっ

ている。柄には紫檀が貼りあわされていた。見た目も小奇麗な短刀で、与えられたときは嬉しくて、他の稚児たちに奪われないよう寝床まで持つていった。

義経は護り刀を撫でるように握った。懷に仕舞っていたため、生ぬるい手触りがする。これを手にすると、昔の倂が浮かんでは消えてゆく。母との別れ、鞍馬寺での稚児生活、弁慶との出会い、奥州への下向、平泉での日々、兄との対面、平家との戦い、鎌倉との確執、都落ち、平泉への逃亡、秀衡の死、そしてその息子の叛意……

握る手に力がこもった。詮無いことだと思つた。なにゆえに鎌倉の兄に疎んじられたのか、もはや知る術もない。平家に敗れた父や兄たちの無念を晴らし、源家を再興するため、兄の代官として東国の武士団を率い、平家軍と戦った。そして滅ぼした。若い頃に鞍馬寺で一念していたとおりになつた。金売り吉次に誘われるまま奥州へ向かい、兄が伊豆で旗揚げしたと聞くや、秀衡のとめる手を振り切つて兄の元へ駆けつけたのも、その願いからだつた。

それが如何なる企てで、兄への野心を抱いているなどと思われてしまったのか。腰越で身の潔白を記した書状を書いたが、真実と受け取つて貰えなかつた。

兄は自分が憎いのだろう。

頼朝と対面したのは富士川の陣で、互いに涙を流して喜んだ。女人のように優しい面輪で、自分の手を取り、兄弟力をあわせて平家を打倒しようと誓つた。はらはらと頬を落ちる涙と、その手が異様に冷たかつたのが、不思議と頭に残っている。

義経は自害を決意した。

「兼房はいるか」

妻の乳母子である十郎権頭兼房を呼んだ。兼房は義経の妻と子の最期を看取り、館の外へ打って出た。まだ戻ってきていないのか、応じる気配がしない。

兼房、と繰り返した。

すると、その声に返事をするように、目前で火焰がひとつ点^{とも}つた。義経は眼を見張る。たちまち幾つもの火焰が浮き出て、義経を取り囲んだ。それは小さな火の穂となって、その周辺だけ濁ったような明るさになる。

義経は用心深く護り刀を構えた。火焰はまるで人魂のようで、空中をゆらゆらと漂う。さらに奇妙な物音が、すぐそばから聞こえてきた。低く小さく、小さく低く。細波^{こさなみ}が砂原をわずかに濡らしては引き、また濡らすといったかすかな騒めき。何かと訝^{うしろ}ったが、それが人の話し声だと、やがて判った。

義経は慎重に辺りを探った。ひとつ、ふたつ、みつつ……何百もの声が重なりあっているように聞こえる。

もうあの世へ迷い込んでいるのだろうか。義経は何とか自分を落着かせようとした。

ささあつと風が吹いた。火焰は揺らぎもしない。

義経は軀を強張らせて、ゆっくりと辺りを見回した。妻戸は閉めきったままで、人の押し入る様子もない。真夏の夜更けの息苦しさにも似た空気が覆っている。

怖い。

ふいに、耳元で誰かが囁いた。

怖いか、遮那王。

「何者だ！」

義経は鋭く誰何した。すると、腹の底から汚物を吐き出す音がし

た。嗤い声だった。

お前を能く知る者だ。

枯れ木のようにしゃがれた老爺のものだった。義経は首を動かした。どこかで聞いた覚えがある。だが、思い出せない。

火の群れは不気味なほど赤く、妖しかった。満月のような輪となり、義経を取り巻いている。ひとつひとつが、暗い闇に浮かんでいる。そういえば平家の旗印も赤だったと思い出した。最期となった壇ノ浦で、多くの旗が海へ投げ捨てられ、それはまるで呉藍紅葉が散らばっているかのようだった。艘の上からそれを眺めていた義経には、海の底に沈んだ平家の者たちが、この真つ赤な海を自分へ見せているような眩暈を覚えた。どうだ、浪の下まで追って来れるかと。

一瞬、火焰が赤い花々に見えた。

「……この怪異はお前の仕業か」

義経はたじろいだ。都にその名が轟いた武将らしく、果敢に声を出した。

「俺は今から自害する、何用だ」

すると、義経の耳元で何々と響いた。

我々は、この地を穢した咎人を見に参ったのだ。

「何だと！」

義経は血相を変えた。白い面が怒気を含んで赤くなる。

「咎人とは聞き捨てならん！」

お黙りなされ。

しゃがれ声は冷静に言い放った。

神々の御前である。

義経は叫びかけた口縁をそのまま閉じた。息をひそめて、右に左に視線を揺らす。

三

ふと、遮那王と呼ばれていた頃の記憶を思い出した。ある時、鞍馬寺に帰ろうとして道に迷った。山道だった。もしくは迷ったふりをしたのかもしれない。今となつては判然としないが、稚児だった自分は夜になつてどこかの谷間に辿りついた。木立が鬱蒼と茂る中に荒れ果てた社がある、ひどく薄気味悪い場所だった。朝になるまで動かないでいようと決めたが、まるで落ち着かなかった。朝日が昇つて急いで逃げ出したが、現し世ならざる靈域に迷い込んでしまったかのような畏れを幼心にもった。

……大勢の眼が見ている。

義経は護り刀を引き寄せた。手のひらが汗ばんでいた。

「神々だと」

左様、この地を護つていらつしやられる神々だ。

「神仏が、なにゆえに俺の前に現れる」

お前をどうするか、決めるためだ。

「なにゆえだ」

咎人だからだ。

ふたたび
二度言つた。

お前の咎は、この地へ参つたことだ。

義経はひとつ息を呑み込んだ。喉がからからと渴いている。だが、そのまま畳上に腰を下ろし、足を組んで端座した。手前に護り刀を置いて、毅然と顔をあげる。

「姿かたちも判らぬ霞に問うようだが、俺がこの地へ参つたことが罪だと申すのか」

左様。

「俺はこの地で育つた。この豊かな平泉が、俺の故郷だ。それが咎だと申すのか」

お前は追われている。鎌倉の男はお前を餌に、この地を攻め

てくる。それはお前の咎ではないのか。

「俺がこの地をいくさ場にすると言いたいのか」

左様。

しゃがれ声は、相変わらず義経の耳近くから聞こえてくる。

義経は膝においた両手で硬い拳をつくった。声は秀衡によく似ていた。数十年前、初めて対面した奥州の鎮守府將軍は、堂々として温かかった。実の父を知らない義経は、我知らず秀衡に父の倂を重ねていたのかもしれない。歳月が過ぎ、病床に臥せるようになった秀衡を見舞い、義経はうるたえた。秀衡は別人のように衰えていた。病がただけ蝕んでいたのか。だが亡くなる数日前に見舞いに訪れると、痩せ細った頬に力ない笑みを浮かべ「判官殿、こちらへお出でなさい」と優しく弱弱しい言葉をかけられた。義経は胸が詰まって、泣いた。それは逝く者の姿だった。

義経は秀衡に責められているようで、心が痛くなった。もしや、秀衡公の御霊が自分を連れてゆくために、舞い戻ってきたのだろうか。もしや……。

お前はこの地に深く関わってしまった。

冷たい声風^{こわぶり}が耳に突き刺さった。義経は首筋に鳥肌が立つのを感じた。

四

遠い昔に、この地を攻めた男のように。

「……何を申す」

あの男も裁かれた。

「……八幡殿のことか」

声が頷いたようだった。

「偽りを申すな！」

義経はいきり立って叫んだ。今の代から四代ほど遡る先祖の八幡太郎義家は、数百年昔に征夷大將軍として陸奥を征伐した坂上田村麻呂共々、天下第一武勇之士と称えられた世に名高い武將であった。その武勇は田村麻呂と等しく、陸奥での二度における戦の功名で高まり、死後は伝説と化した。

「八幡殿を辱めるか！」

お黙りなされ。

しゃがれ声は尋常ではなかった。

あの男は、この地を変えた。

八幡太郎義家とその父が戦った相手は、この地を治めていた安倍一族だった。奥州十二年合戦とも呼ばれる戦で滅び、代わって義家たちに味方した清原一族が支配することとなった。だがその一族も内紛が起こり、再び舞い戻った義家が力を貸した相手、安倍一族を母に持つ藤原清衡が実権を握ると、平泉に都を築いた。奥州藤原氏の祖である。

ようやくこの地が鎮まった。だが、今度はお前がやって来た。やがてまた変わる。

その意味する処に、義経は顎を下げ疲れたように顔を伏せた。秀衡公の遺言はこうだった。鎌倉から己を討つよう書状が届いてもそれを無視し、残された子息たちと自分で鎌倉の軍勢に立ち向かい奥州を護るように

だがそれは果たされない。泰衡は自分の頸を鎌倉へ送る。それで終わるだろうか……

それは神々もとめようがない。だから、お前を裁くために現れたのだ。

義経は火焰を睨んだ。心なしか、上に下に大きくなって見える。

話し声は荒波のように耳障りになってきた。

秀衡公のはずがない。義経は念仏を唱え、目の前に置いた護り刀に手を伸ばしかけた。が、消えていた。

「……どこに」

その時、閉まっていた妻戸が開いていることに気がついた。妻戸の向こうには中庭が見え、弓形に反った瘦木が眼についた。枝葉に隠れるようにして白い花々が可憐に咲いている。小さな蕾も見える。それは白く花を咲かせた。

義経は立ち上がりかけて、よろめいた。御簾の中に安置していた妻と子の亡骸が失せている。兵士たちの怒号も全く聞こえない。

体が熱くなってきた。義経は息を荒げ、辺りを捜し回った。俺は自害するというのに。奥方も若君も家来たちも死んだ。俺も死ぬ。弁慶が待っている。だが、まだ腹を切っていない。護り刀はどこだ。どこにある。

耳元で、ささあつと風が散った。

裁きは下った。あの男と同じ、無間地獄だ。

一斉に火焰が四方に飛んだ。天上や壁や床に火が這いずり、室内は炎に包まれる。

義経はあつと驚いた。声の主をようやく思い出した。

吉次だ。

そこで、眼が覚めた。

夢か。

畳を床にして眠っていた義家は、かすかに瞼を開けた。室内は薄暗く翳っていた。日が暮れようとしているらしい。朝餉の粥を食し

たまでは頭に残っている。どうやらずっと寝入っていたようだ・

五

義家は傍らの几帳を見上げた。部屋中に薬湯の匂いが染みている。それが鼻から這入り込み頭の鬘を追い払うと、徐々にはつきりとしてきた。

途端に咳が出た。胸が潰れそうなほど激しく咳き込み、義家は蛇のように身を逸らす。胸の奥に何かが巢食い、自分の口から這い出ようとしている。おぞましく哀れなもの。それは病という名の物の怪だ。

ほどなく、自分はこの物の怪に敗れ去る

口辺を抑える手が震えた。まるで枯れ枝のような指だと感じた。老いまでもが己を殺そうとする。それに抗する手立てはない。出家しても、自分が黄泉路へ旅立つ日をひたすら待つだけだ。

義家は苦しげに息を吸っては吐いた。涙がこぼれた。これが八幡太郎は恐ろしやと今様にまで詠われ、天下第一武勇之士と称えられた者の成れ果てだとは情けない限りだった。

次第に咳がやんで、義家は大儀そうに上身を起こした。小さく息をついて、後ろを振り返り、枕元にある文箱へ眼をやる。文箱は古めかしく、長い間使われていた跡があちらこちらに見られた。それに手を伸ばしかけて、引つ込めた。文箱の中に仕舞った書状は、何遍も読んだ。今更手に取る必要もない。

しかしもう一度書状を広げて、嘘ではないのか幻ではないのかと確かめたい気持ちもあつた。悪あがきだとは感じている。けれど心がざわめいて、気にかかっている。義家は骨と皮だけになった腕を動かし、文箱を開けて、書状を取り出した。昨日早馬がもたらした知らせ。

義家はため息をついた。やはり、読んだ通りのまま白い巻紙に記されてあつた。遠い常陸の国で、息子の一人が叛乱を起こしたと。見慣れてしまった文字を眼で追いながら、義家は顔が青ざめてゆ

くのを感じた。お前もか。お前もか。馬鹿者めが。

義家は書状を文箱に投げ捨てた。胸が苦しい。我が身に巢食う物の怪が、源家へも取り憑いている。我が家を蝕んでいる。息子たちを愚かな所業に追い立てている。このような時、父上ならばどうされたらう。病を押してでも、息子たちの手打ちに向かったらうか。

父頼義の射るような視線が、己へ濯がれているような思いに囚われた。いつも厳しく結ばれていた口唇がのっそりと開いて、太郎と呼んでいる。この有様は何だと。義家は身を硬くした。偉大だった父。北の地での長い長い戦も、父の猛々しかった魂を奪い取ることができなかった。

今は亡き頼義の生前が、浮かんでは消えまた浮かんだ。何故、思いつくのだらう。義家は額を手のひらで触り、鼻で息を吸い込んだ。薬湯の苦い匂いが巡る。

ああ、そうか。義家は頷いた。夢だ。夢を見たのだ。

六

白い雪が一面を変えていた。くぐもった天上から次々と落ちてきて、戦を困難にさせた奥州での戦い。自分はまだ若かった。その地を支配していた安倍一族は勇猛で、巨木のような大男が、自分と父を追い詰めようとする。だが、勝ったのは我々だった。

次に壮年の己が出てきた。再び奥州の地を踏んでいる。滅んだ安倍氏に代わって、別の一族が支配していた。その家中で内紛が起こり、安倍一族の血を引く男に家督を継がせた。己が武名はいよいよ高まる。しかし都の貴族たちは冷ややかだった。自分への警戒。様々な謀り事。やがて、嫡男が四国で謀反を起こす……

義家はこめかみを押さえた。朝廷は嫡男を配流にする命を下したらしいが、全く果たされていない。自慢の息子だったが、何が不満で叛乱の狼煙をあげたのか。歳を追うごとに父に似ていった息子は、時折自分を上目遣いに見上げる眼差しが父にそっくりだった。父は不満がある時に、よくそういう眼をした。息子は朝廷のどのような命にも肅々と従う源家の棟梁に、齒がゆさでも感じたのか。一人は西国で、また一人は東国で朝廷に反旗した。

父と共に築いた源家の栄が、朽ちてゆく。

義家はしばらく動かなかった。いつもは目覚めるだけで飛んでくる家人たちも現れない。

静かに眼を瞑った。少々動いただけで躰が疲れた。本当に自分は老いて、死ぬ身なのだと強く感じた。横になろうと足を滑らせて、何かが肌を擦った。

義家は懷に手を入れた。すると、小さな剣が出てきた。

「……これか」

義家は破願した。護り刀だった。

これには由来があった。頼義がある夜、夢の中で岩清水八幡宮に参詣し、社壇で靈剣を賜った。眼が覚めて枕元を見ると夢で見た靈

剣があり、その日、奥方の懷妊が判ったのである。真偽は謎だが、剣は源家の家宝となり、この時に産まれた義家が父から授かった。以来、義家は護り刀として大切にし、どのような時も我が身から離さなかった。

義家は剣を撫でた。これも老いた。主人と共に歳を取った。あとは自分の最期を見届けるだけだ。

ふと、戦で死んだ男を思い出した。幼少時から自分に仕え、常に側にいた家人だ。この護り刀を大切にしよう、くどいくらい説教された。奥州での合戦で男は討ち死にし、自分は護り刀を抱きながら、声をあげて泣いた。

義家は小さく笑った。あと少しで再会するだろう。恐らく厳めしい顔をして出迎えてくれるに違いない。頭を剃った姿に大笑いするだろうか。

懷に仕舞おうとして、腕がとまった。いつにもまして、薬湯を煎じた匂いが濃厚で息苦しい。まるで桶一杯に薬湯を入れて、残らず室内にまき散らしたかのような。重くなる頭を堪えて、瘦せ衰えた指が掴む短剣を改めて凝視する。

此処に在るはずがない。

唐突に思い出して、狼狽した。霊剣は病癒祈願のため、出家した時に八幡宮へ奉納したはずだった。己の懷に在るべきではない。

汗ばんできた手の内で、霊剣の重みが肌に吸いつく。まだ夢を見ているのだろうか。

七

義家は顔をあげた。外で小石が転がるような軽い音がした。はじめは風が吹いているのかと思つたが、よく耳を澄ますと、人が囁いているように聞こえてくる。それは足音にも似て、ひたひたと義家の寢所まで近づいてきた。

誰だと思つた瞬間、松明のような火焰が幾つも浮きあがり、義家をぐるりと取り囲んだ。焰は上下に長くなり、天井と床に広がる。瞬く間に一面は火の海と化した。

義家は肉の削れた面に驚愕を浮かべたが、すぐに念仏を唱えた。忽ち火はよるけ、浪のように大きくうねり、義家の目前に群がるとひとつの塊となった。

義家はうつと呻いた。それは鬼となった。

鬼形の輩は、地獄絵に描かれている姿其の者だった。二本の角が頭から生えていて、ざんばら髪に、頬は強張っている。眉は吊りあがり、眼は浮き出て、鼻は大きく、口は耳まで張り裂けている。頭が天井板までとどく巨漢で、布切れを腰に巻いている。腰も足も幹のように太く、病床の義家を踏み潰すなど造作もない。まことに怖ろしい風貌をしていた。

義家は霊剣を握る手に力を込めた。だが指は空振りをした。手のひらにあつた護り刀は、跡形もなく消え失せていた。

「八幡太郎義家、多くの罪無き者を殺した咎により、地獄へ連れてゆく」

異形の鬼はぐわつと口を割いて、獣のような牙を鳴らすと、腕を振りあげ義家の肩を掴み、まるで子犬を扱うように臥所から曳き摺り出した。義家は床に振り落とされ、胸を押さえながら、咳を吐く。鬼か。

乱れた息を繰り返し、義家は座り込んだまま頭だけをあげた。鬼が義家を見下ろしていた。

「……お前が、儂を連れてゆくと」

「そうだ」

鬼が頷いた。

「多くの罪無き者を殺した咎は重い」

「……何と」

義家は鬼の言葉に、深い皺が刻まれた目尻を吊りあげた。

「儂を咎人と申すのか」

豪胆にも、鬼を睨みあげる。

「確かに儂は病に冒されている。お前に言われるまでもなく、ほどなく死ぬだろう。だが、その名を辱めるようなことを行った覚えなどない」

声色は故いが張りがあつた。

だが鬼は、義家を吹き飛ばさんかぎりに嗤った。

「何を言うのか！人を殺め、此の世を血で穢した奴めが！お前の背後には屍が累々と横たわつておるわ！見るがいい！」

鬼は義家の背後を指した。義家はその指の先を這うように躰をよじって振り返り、青ざめる。そこは広大無辺の暗闇となっていた。道無き道には大勢の鐘メが打ち捨てられている。どれも血を流し、無残な姿だ。或る者は頸がなく、また或る者は腕がなく、足はなく、耳はなく、眼はなく。鎧を着込んだ武將に腹巻姿の雑兵たちが、死に際の恐怖を浮かべて重なりあっている。彼らは恨めしげに義家を見つめていた。

手前には、大楯に四肢を投げ出している男がいた。梔子色くちなしの衣を身につけ、全身が血に染まっている。男は鬼にも負けない悪鬼の形相で義家を睨みつけていた。

義家は拳を硬く握って胸に押し当てる。あの男だ。安倍一族の軍勢を率いた猛将で、父と自分を睨みながら死んでいった男だ。

「判ったか！お前は悔いる心もない！悪趣へ落ちるのは当然のことだ！」

鬼は大きな眼を動かして言い放った。

八

義家は鈍々（のろのろ）と立ちあがった。鬼の腰辺りまでしか身の丈はない。だが正面から鬼に向いた。

「僕は堂々と戦った。蝦夷の兵どもは強く雄雄しかったが、我々が戦い打ち負かしたのだ。何を恥じる必要があるのか」

「まことにそう思うのか」

「無論。僕は己の名を辱めた覚えなどない」

「だが大勢の者たちを殺したのは罪深い。お前を地獄へ連れてゆかねばならない」

鬼は少しの哀れみも見せなかった。

「そのように神々がお決めになった」

義家は源家の氏神である八幡神を思った。岩清水八幡宮で元服し、その名も八幡太郎と号した義家には最も尊崇する武の神だった。

はつきりとした畏れが、じわじわと足下から這い上がってきた。

「神々は、お前がかの地を変えたことに腹を立てていらっしゃる」

鬼は平然と言った。

「ゆえに、神々はお前を地獄へ堕とすのだ」

その声は、矢庭に異なつて聞こえた。

鬼は口を開くと、火焰を吐き出した。人の頭程度の赤い火の玉で、義家の鼻の先で、揺ら揺ら、揺ら揺らと、まるで生き物のように漂う。老武者の衰えた顔立ちが、かすかに浮きあがる。

義家は漠然とそれを眺めた。松明。篝火。火矢。赤く彩られた戦場の情景が、目前に甦ってくる。

「お前はかの地に深く関わってしまった」

禍々しく浮かぶ鬼火。自分は以前にも眼にしただろうか。

「地獄へ連れてゆく今一つの咎は、その地へ参ったことだ」

不意に義家の心が騒いだ。いつぞや似たような言葉を耳にした覚えがある。どこかで聞いた。誰かが自分へ言った。

義家は頭のとっぺんから足の爪先まで、鬼を何度も何度も眺めた。そのようなはずがないと念じながらも、寝間着を汚した墨のように染みついている。この異様な鬼を知っているわけがないというのに「此のような浅ましい姿に覚えがあるか」

しゃがれた声と言った。

「お前たちが我らを斯様な異形に仕立てたのだ」

義家は仰け反った。誰かが後ろで束ねた髪を掴んで引っ張った。

「それは神々もとめようがない」

鬼の言葉はくぐもってよく聞こえなかった。だが枯れ木のようにしゃがれた声だけは耳に残った。

九

義家は我知らず後ずさった。胸が苦しい。物の怪が暴れている。己を殺して、外へ出ようとしている。護り刀を手放してしまつたせいだ。あれほどきつく言われていたのに。護り刀がこの手にあれば、自分で退治して……

義家はよるめいた。前屈みに倒れ込み、咳を吐く。床に手と膝をついて、背を丸め、繰り返し繰り返し吐き出す。物の怪が腹の底から足早に駆けあがってくる。臍腑を喰い破り、喉を蹴つて、舌を引き千切り、口を裂いて飛び出るつもりなのだ。

ふと、御簾越しに格子が上がっているのが見えた。その向こうには広大な中庭がある。池のそばの植木に眼が留まつた。弓形に反つた瘦木。枝葉に隠れるようにして可憐な白い花が数えきれないほど咲いている。小さな蕾も見える。それが花開いた。

頭上で、雷が鳴った。

「出立時刻となつた！八幡太郎義家、お前を連れてゆくぞ！無間地獄へな！」

げえつという唸りと共に、義家の口から何かが落ちた。

火焰だった。

義家は悲鳴をあげた。鬼が肩を掴み、荒々しく義家をひきずつてゆく。

儂はこの鬼を知っている。知っているぞ！

きちじだ。

そこで、眼が覚めた。

「殿、お呼びでございますか」

十郎権頭兼房は足音も立てずに、持仏堂へ入って来た。鎧姿である。泰衡の軍勢を相手に果敢に戦っていたとみえる夥しい血糊が、

鎧の表面に残っていた。館には僅かな手勢しかない。平時であればすぐに参上しただろうが、今は異なる。髪が白くなった瘦身の老兵は、生真面目な風貌を変えずに御前へ控えると、平伏した。

軍馬の嘶き（いななき）や兵たちの喚声が外から聞こえてくる。

敵が周辺まで迫ってきたのだ。それは己の郎党の討ち死を意味している。

義経は間近の昂ぶりとは反対に、静かに告げた。

「ついに自害するべき時がきたようだ。ついてはどのようにすれば良いと思う」

中庭に咲いている花は何色かと問うような穏やかさだった。

兼房は鈍々と頭をあげた。老いた目元に涙があった。

「……左様でございますれば」

言葉も濡れていた。

「……佐藤兵衛が京の都で切腹した時の有様を、民衆は後々まで褒め称えております」

「そうか、ならば造作もない」

義経は頷いた。佐藤四郎忠信は奥州を去る時に秀衡から与えられた家来である。兄の三郎継信共々、よく仕えてくれた。三郎継信は平家の軍勢との屋島における戦いで義経を庇って討ち死にし、四郎忠信は義経が鎌倉に追われ吉野山へ逃げ込んだ時、主君の代わりとなって追っ手と戦い、その後都へ上がって密かに隠れていた処を襲われ、奮戦の末に自害した。

義経は瞑目した。身代わりとなった兄弟の倅が道を辿るように思い出される。とっさに前へ立ち塞がって、己に放たれた矢を首に受けた三郎継信。物静かな男だった。弟の忠信は必ず奥州へ下向させようと思っていたが、吉野山で自害しようとした己を諫め、結局置き去りのような形で残してしまった。兄に似て口数は少なかったが強靱^{たけなみ}だった。命を張って仕えてくれた兄と弟だったが、自分はそれに報いることなく死ぬ。

少しの後、義経は眼を開いた。

十

「疵口が広いのが良いのだな」

懐へ手に入れようとして、思い出したようにため息をつき、肩を落とした。

「愚かなことよ……」

「如何なされました」

素早く兼平が伺う。義経は若さが削げ落ちた面に自嘲を浮かべた。
「護り刀を無くしていた……鞍馬寺へ居た頃に、別当殿から頂いた大切なものであったというのに……」

肌身離さず大事に持っていた護り刀を、奥州へ落ちてから無くしていた。懐に仕舞っていたはずなのに、いつの間にか見当たらなくなってしまったのである。

「殿、恐れながら……」

「何だ」

義経はあつと口を開いた。組んだ足の手前に見慣れた短刀があった。護り刀だった。

なにゆえに、と訝りながら手に取ると、馴染みのある感触が肌に触れる。鞘尻は唐草模様に籐を巻き、竹輪を互い違いにあしらっている。紫檀を貼りあわせた柄を握れば、無くしたのは偽りで、ずっとそうで在ったかのように感じられた。

「……死出の共をするために現れたか」

義経は優しく笑った。それから傍らの御簾に眼をやった。中では妻子が自害している。その亡骸を確かめて、護り刀を握りなおした。
「私が死んだら、すぐに館に火をかけよ」

兼房は無言で頭を下げた。

生暖かい風が義経の首筋を撫でた。奥の妻戸が半分ばかり開いている。兼房が入ってきた戸口だ。その向こうには小枝の先が覗いていた。細い枝には白い花々が見事に咲いている。卯木の花だ。

義経はまるで初めて眼にするかのように瞬きもしなかったが、やや待って首を傾げた。

「……そういえば、昨夜不思議な夢を見た」

護り刀を手に、呟くように言った。

兼房がつと顔を上げる。

「夢でございますか」

「そうだ……夢にも白い卯の花が出てきた。私は死に際の老人で、鬼が地獄へ引きずっていったのだ。お前がこの地を変えたと叫んで……」

額に手を当てた。とても怖ろしい光景だった。

「私は病に冒されていた。ひどい咳をしていて……血を吐いた……」
床に散らばった赤い血が妙に生々しかった。あんな夢を見るとは、義経は深々と嘆息をついた。自分にも鬼が迎えにきている。その鬼どもは夢とは違い、人の姿をしていて、館の外で己の死を今か今かと待っている。

「眼が覚めて、夢であって良かったと思ったが……」

苦笑った。目覚めても、逝く先は地獄だ。

「つまらない話をした。自害しようとする時に、夢の話などいいえ、としゃがれ声が遮った。

「夢ではありませんぬ」

義経は兼房を見た。人がよく忠実な心根が全身からこぼれ落ちていた老兵は、皺をゆるませて嗤^{わら}っていた。

十一

兼房、と義経は口にした。なにゆえに、嗤っていると。

老兵は指を動かした。義経はその先を見ると、妻戸があった。白い卯の花が、赤く赤く染まっている。

否、それは花ではなく火焰だった。

血の色をした火群が、揺らめいている。

義経は黙ってそれを見続けた。一面が真っ赤になっている。どこかで眼にした情景。浪の上か。いや、違う。

「夢ではありませぬ」

しゃがれた声が、再び告げた。

赤い闇は次第に広がってゆく。

義経は手の内に護り刀の温もりを感じた。己はいつ腹を切っただろうか。だがこれは夢ではないという

やがて、頷いた。

「無間地獄へゆくのだな」

「もう、参っております」

吉次は平伏した。

夢は終わらなかった。

その日は晴天で、ゆるやかに流れる河を眼下に一眸すると、二人連れの旅人は小高い丘を下った。ひとりは老人で、ひとりは青年。どちらも丸い被笠を頭に、股引に草鞋を履いた袈裟姿である。旅の途中なのか、所々埃や汚れが目立つ。

年老いた旅人は名残惜しげな足取りだった。この地を忘れまいとするかのように、履き古しの草鞋で一步また一步と踏みしめてゆく。その小さな背中を追う若い旅人に、時折振り返っては話しかけ、周辺の景観を見渡しては下ってゆく。

ちょうど下り立った時に、薪を背負った農夫が近くを通りかかった。農夫は田畑を耕していたのか土まみれの汚い格好だったが、旅人たちへ礼儀正しく頭を下げた。

「よいお天気ですなあ」

農夫は北のなまりが強かったが、老体は頷いた。

「まことに……眼下に見下ろす北上川は、日光に煌いて美しいばかりです」

すると農夫は丘の方を見上げた。

「旅人さまは……あそこへ上られたんですか」

「はい、わたくしどもは奥州を旅しております……」
背後にいた青年が軽く頭を下げる。

「少々、俳句をたしなんでおりますので、徒然に詠んでおりました」
「はあ、そうですか。旅人さまはこの地をご存知で？」

老人は頷くと、一句、口にした。

老人は深々と頭を下げた。

十二

「そのとおりでございます。この地はまったく夢の跡となってしまいました」

寂れた頬に疲れたような色を浮かべる。

「昔、この地には、かの九郎判官殿が住む館があったといひます。今となつては、草木しか見えませんが」

「無常でございます」

両手を合わせた。青年も同じ仕草をした。

「遠い昔には、京にも負けない都があつたと言ひますが、わしらには及びもつきません。なにせ田畑しかありませんから」

「栄耀一睡のうちにして……と申します」

老人は穏やかに言つた。

「判官殿の高館へ参ることができて、旅の目的のひとつが叶ひました」

「それはようございましたなあ」

農夫も相槌をうつてから、何かしら思ひついたように切り出した。

「判官殿といへば……この方をお連れした者をご存知ですか？」

老人は笠の縁を心持ちあげて、思案げに顔色を曇らせたが、首を横に振つた。

「申し訳ないのですが、どうやら忘れてしまつたようです」

農夫は頭を振つた。

「名前を知らなくても当然です。この男は商人だつたそうで、その最期が伝わっておりましてなあ。哀れなことに、地獄へ落ちたそうですよ」

「それはまた……」

「なんでも、判官殿をお連れした罰により、神々によつて無間地獄へ落とされてしまい、絶え間ない責め苦を味わつてゐるとか」

農夫はしゃがれた笑いを洩らすと、再び重たそうに薪を運び始め

た。旅人たちも農夫に背を向ける。

しばらく山道を歩いてから、旅の老人は誘われたように肩越しに振り返った。遠くに先程までいた小高い丘が見える。そこには、忘れられたように一本の痩せた木が植えられてあったのを思い出した。その木には、白い小さな花々が咲き誇っていた。

江戸からやって来た老人と青年は、さらに細い道を旅してゆく。それを見送る館の跡地では、白い卵の花に交じり、小さな小さな蕾が垂れ下がっていた。

その商人は、判官殿を繰り返し繰り返し地獄へ落とさなければならぬそうですよ……

花は、やがてひっそりと咲いた。

- 完 -

十二（後書き）

ここまで読んで下さって、ありがとうございました！
普段は「月夜ノ晩ニ見ル夢」というブログで小説を書いています。
よろしかったら、おいで下さいませ（*^ ^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4996g/>

百代の夢幻

2010年10月8日15時36分発行